

econ. No. 19

知との出会い、経済学部講演会・シンポジウムの報告から

特集 経済学って!? 教室から世界を考える

●講演会のススメ 「知との出会いの『場』としての大学」

news1 2008年度 地域研修報告会

interview OB訪問—働きマン②小林酒造 小林米孝さん

連載企画 私の履歴書 神谷順子教授

news2 インゼミは楽しい!

JICA インターンシップへの参加

就職情報



タイガー手廻し式計算器 (1923年～1970年製造)

現代の計算機はコンピュータ主流の時代であるが、科学的数式の演算や、経済に関わる全てのシーンで欠かすことの出来ない道具が計算機である。この「タイガー計算器」は現在の電子式卓上計算機、いわゆる「電卓」が登場する以前の、比較的簡単な加減乗除の計算機として広く使われていた10桁までの機械式計算機である。写真のものは今回OB訪問に登場していただいた小林米孝さんが経営する小林酒造で使われていたものである。(現在、小林酒造・蔵元北の錦記念館に展示されている。)公務員の初任給が4,863円時代の昭和24年(1949年)頃、28,400円の製品である。小林酒造では事務職1人に1台の占有で使用されていた程で、全国的にも普及し、欧米でも特許を取得した20世紀の産業遺物として貴重なものである。

(参照:株式会社タイガー「タイガー手廻し式計算器資料館」)



※写真は実物の1/2.5



知との出会い、経済学部講演会・シンポジウムの報告から

特集 経済学って!? 教室か

20世紀末、そして続く21世紀の幕開けは、未来への希望に多くの言葉が語られました。その中で、「100年に一度」といわれるような経済的危機に遭遇している世界に、どのような未来が待っている私たちに、全ての現象がつながっています。いま、この北海学園大学で、この教室で、こ

私たちをとりまく日々の暮らし全てが、経済活動に関連していることはいまでもありません。本学経済学部では、グローバル化する社会の中で引き起る様々な現実に対して、各分野の専門的、先進的講義をカリキュラムとして開講することにとどまらず、大学そのものが積極的に外部と繋がり、社会に開かれた存在として、地域社会との連携・情報発信を行っています。また、多くの分野の専門家や研究者、実践者、現場で働く人々と議論の場を作り出すことにより、現実社会の諸問題の解決に向けた多様なアプローチを試みています。この特集では、その一端を本学経済学部の特色として紹介します。コープさっぽろ寄附講座、市民公開講座、2008年に行われた様々な講演会、シンポジウムの報告、そこから大学という場での「知」のありかを探ってみたいと思います。

コープさっぽろ寄附講座について

講座責任者 小坂 直人 教授

自分たちの将来を切り開く鍵は自分たちの周りに埋もれており、それを発見し、掘り起こすことが出来るかどうかが地域の持続的発展にとって決定的な意味をもっている。2007年度から始まった「コープさっぽろ寄附講座」に登場する講師陣（3期で延べ36人）はさまざまな角度からこの鍵のありかを示してくれた。北海道は中央からはるかに遠い日本の北の果てにあって、積雪寒冷地ゆえの美しくも厳しい自然は残っているが、経済的文化的にはもっとも遅れた地域であるとの認識が定着しきっているように思える。しかし、その認識はそもそも中央的な発想であって、北海道を基点に考えればまったく別の世界が開けてくることを私たちは学ぶことができた。とはいえ、



この新しい世界を切り開いていくのは容易ではない。少なくとも、5年、10年の単位ではなく数十年はかかる長期の取り組みが必要であろう。そして、その取り組みが共同に裏打ちされていることも必要であろう。今回の寄附講座が知の共同体である大学と生活協同組合との協同（コラボレーション）によって実現したことは暗示的である。

今回の寄附講座の全容については『北海道の未来を展望する』中西出版（全3巻）という形で公刊し、講座を受講できなかった皆さんにも内容に触れていただく機会を持つことが出来た。書店等で手に取っていただければ幸いです。

今回の寄附講座の全容については『北海道の未来を展望する』中西出版（全3巻）という形で公刊し、講座を受講できなかった皆さんにも内容に触れていただく機会を持つことが出来た。書店等で手に取っていただければ幸いです。



コープさっぽろ寄附講座



コープさっぽろ寄附講座について聞く



「北海道の未来を展望していきたい」

コープさっぽろ
大見 英明
理事長

——寄附講座を始めるきっかけについて聞かせて下さい。

大見理事長 社会貢献として北海道のために何かできることはないか。これが直接のきっかけです。バブル経済崩壊以降、北海道は元気がありません。金融危機でさらに

困難な事態も予想されます。しかし、若者には厳しい状況を打破する可能性が秘められていると思います。北海道には開拓者精神という歴史的な経験もあります。未来を展望することによって、若者が地域づくりに踏み出す新しい道筋を示すことができないかと考えたわけです。

——未来に向けてどのような展望を打ち出すことができたとお考えですか。

大見理事長 1期目は北海道の第1号者、2期目は全国的に活躍する方を加え、3期では韓国から講師を招き、グローバルな視点で話をさせていただきました。足元から少し

ずつ視点を広げながら、北海道の未来を展望していきたいと考えたわけです。また、講座を始めるにあたり2つのことをイメージしていました。産業クラスターの育成にどう貢献できるか、ネットワークの場をいかに創出できるかということです。講師の皆さんにはテーマをご理解していただいた上で、専門の立場から新たな視点を提起してもらえたと考えています。

——反響はいかがでしたか。

大見理事長 多くの方々から評価の声をいただいています。講座を受講した学生の皆さんのレポートも、読ませていただきました。

ら世界を考える

わずか10年に満たない時間の中
っているのでしょうか。同時代を
の「世界」を考えてみませんか。



雨宮処凛講演会 2008.10.11.

「若者と貧困～地域は貧困とどう向きあうのか～」をテーマに、北海道出身で若年労働者の貧困問題に対して果敢な言動で知られる雨宮処凛さんを招き、北海道の労働問題に詳しい本学経済学部川村雅則准教授との対談が行われた。深刻な不況、新たな現代の貧困の問題に切り込んだドキュメンタリー映画(2008年・土屋トカチ監督)「フツの仕事をしたい」の上映やビッグイシュー日本*の販売などもあり、労働・貧困問題は決して学外で起きているだけのことではないことを痛切に実感させられた。

*日本では2003年9月に創刊、ホームレスの人々の仕事を提供し自立を応援する事業。

介護・介護労働の今とこれからの考えるシンポジウム 2008.10.17.

「介護地獄はもうごめん!! 介護に希望と笑顔を!!」というサブタイトルが冠されたシンポジウムの冒頭から、介護現場の悲痛な現実が介護施設の運営者、介護福祉士の方々から次々と報告された。介護報酬単価の引き下げ、社会保障費の抑制政策が実施される中、介護保険制度導入時にうたわれていた「介護の社会化」という理念は実現されるのか。

学生パネラーの介護労働現場の実態調査報告も行われ、更にリアルな実態が明らかになった。

経済学部・法学部合同市民公開講座 2008.10.11.～11.8. (全5回)

道民カレッジ指定・連携講座として「比較してみる北海道」をテーマに全5回の公開講座が行われた。北海道は、都府県とは異なる産業構造を持ち、同時に北海道の風土に根ざして社会や政治の構造にも特色がある。北海道に住んでいる私たちにとっては当たり前と考えられがちな北海道の産業経済と市民・自治・政治について、その特殊性や優位・劣位の問題などを経済学部と法学部が合同で、また受講者とともに考えて行く場として開かれた。



講演会で対談した雨宮処凛さんと川村雅則准教授



経済学という学問は本や教科書を通して学ぶことも大切ですが、それだけではありません。社会の第1線で活躍する講師の方々の講義を通し、生きた経済を学ぶ良い機会になったと思います。私も毎回、出席させていただいて多くのことを学びましたが、コープさっぽろにとっても得るものは大きかったといえます。とくに、環境問題と食の安全がいかに大切であるか、改めて考える機会となりました。

——次期講座の予定を聞かせて下さい。

大見理事長 今後はさらにグローバルな視点から北海道を見つめ直していきたいと考え

ています。北海道の気候風土や産業構造を考えると、世界には、北欧のようなお手本となる地域がいくつもあります。例えばフィンランドと北海道は社会的な規模は変わりますが、携帯電話端末では世界最大のシェアを誇るノキアのような企業が生まれています。4期以降の講座ではそのような国や地域からも講師を招き、よりグローバル化に対応したものを考えています。準備ために1年お休みをいただいて、また2010年度から再開したいと思っています。学生の皆さんには、大学の中での学びだけではなく、多様性の中に未来を見だして欲しいと思います。



介護・介護労働の今とこれからの考えるシンポジウム



市民公開講座で講義する北倉彦彦経済学部教授

講演会のススメ

知との出会いの『場』としての大学



平野 研 ● 経済学部講師

雨宮処凛講演会で司会をつとめる平野講師

大学は、知識を習得する『学校』であるとともに、様々な知との出会いの『場』でもあります。もちろん、一番大きな知との出会いの『場』は、各分野での専門家による講義です。しかし、大学での知との出会いはそれだけではありません。日本国内や、世界中の知にアクセスできるのも大学という『場』なのです。その役割を果たす一つが、大学で開かれる様々な『講演会』なのです。

北海学園大学では、研究者に限らず、様々な分野の専門家を招待し、講演会を開催しています。行政機関のエキスパートや、企業・市民団体の代表者、文化人など多岐にわたる人材を招聘しています。各分野の立場から一つのテーマについて話していただく「連続講座」、同時に複数のパネリストが議論を交わす「シンポジウム」、そして参加者との議論も重視した「セミナー」とその形式も様々です。また講演会は、学内の単位取得となるものもあれば、市民講座や一般に公開されるものもあります。学生から一般の方まで参加できる講演会は、新聞などにも度々取り上げられ、地域社会においても重要な役割を果たしている



「介護・介護労働の今とこれからを考えるシンポジウム」をとりあげた北海道新聞の紙面(2008.11.3.)

といえます。

このような様々な知との出会いは、単なる知識の習得ということ以上の意味があります。皆さんが大学で出会った知は、卒業後社会に出て広がっていきます。そして次には、多くの経験を積み重ねた皆さんが専門家として大学で講演会をするために戻ってくるのです。大学は知識の出会いの『場』であると同時に、皆さんや社会とともに成長する『公共空間』でもあるわけです。

北海学園大学経済学部では、様々な分野で活躍するOBや、国内外で活躍する知識人・専門家による講演会を今後も多数予定しています。これまで全く知らなかった世界や、より詳しく知りたい世界への窓口として、講演会に参加してください。そして、そこで出会った知を出発点として、より多くの知を身につけて、いつの日か北海学園大学の講演会の壇上に立ってください。

特別講演会・高遠菜穂子さんに聞く、イラクの現状 2008.11.19.



講演会終了後に設けられた意見交換の場

「世界の関心が薄れつつあるイラクは今いかなる状況にあるのか。イラクの若者たちはいかなる日常を生活しているのか。兵士として生きる、働くというこの実態は…」。

講師にイラク支援ボランティアの高遠菜穂子さん、ゲストにイラク再建青年グループ代表として活動するカーシム・トゥルキさんを招いて戦禍のイラクの実態と復興に向けた若者たちの取り組みが報告された。現地の生々しい映像と、困難な状況下にありながらも懸命に生きるイラクの人々の姿に共感を覚えると同時に、マスコミなどでは伝わらない事実が数多くある現実を認識した講演会となった。さらに、講演会終了後も会場を移し、お二人と、興味を深めた学生との熱心な意見交換が行われた。



若者労働の現実と、私達のこれからを考えるシンポジウム 2008.12.5.

労働組合で働く出口憲次さんを講師に招き、現代社会で様々な発生している労働問題と労働組合が果たしている役割を現実の具体例とともに語っていただいた。非正規労働者を組織対象



としてこなかったわが国労働組合の歴史、不況下における非正規雇用労働の問題があらわな現在、まさに今こそが労働組合の果たす役割が重要である。地域の人達に必要とされる、支持される労働組合にならなければならない、そう考える出口さんの視点は、これから社会に巣立つ学生にとって多くの示唆を含むものだった。

2008年度 地域研修報告会

2008年12月6日・13日
D20番教室・34番教室



「地域研修」は地域経済学科の特徴ある科目の1つとして2004年度から始まり、今年度で5年目になります。昨年度からは経済学科の特別講義としても実施され、まさに経済学部地域研修として年を重ねる毎にその成果は広がっています。12月の報告会とともに、報告書の制作もすすめられています。

北海学園大学経済学部地域経済学科の特色の一つである「地域研修」。今年もその報告会が12月6日・13日の2日間にわたって開催されました。2008年度は、全部で21の報告が行われました。テーマは、地域の活性化や地域開発、地域インフラ、地場産業、地域メディアなど、ゼミによってさまざま。

夏休み前までの準備を含めた研修の成果をみせる大舞台で、各ゼミは、見ている人に理解してもらえよう、パワーポイントやOHPを駆使するなど、工夫をこらした報告を行いました。

初めは照れや緊張が見られた報告者も、徐々に慣れてきたのか、次第に堂々とした話しぶりに変わっていきました。また、今年度から質問時間を設けたため、活気あふれる報告会となりました。



プレゼン映像を操作する発表者たち



普段の大学生活ではなかなか味わうことの出来ない、「地域研修」や「地域研修報告会」を通して得た経験。今年もこの経験が、学生たちを一回りも二回りも大きく成長させてくれたようです。



ゼミ名	テーマ	研修地
浅妻ゼミⅠ	地方における公共交通	帯広市・陸別町・小清水町
浅妻ゼミⅡ	現場で学ぶ交通まちづくり	京都市・堺市・和歌山市・大阪市
池田ゼミⅡ	新日鉄室蘭工場見学研修	室蘭市
内田ゼミⅠ	本別町における「キレイマメ」ブランド化への取り組み	本別町
奥田ゼミⅠ・Ⅱ	地域建設業の現状と課題	網走市・斜里町・小清水町
河西ゼミⅠ・Ⅱ	夕張における中小零細事業者の経営実態と課題	夕張市
川村ゼミⅠ	夕張における中小零細事業者の経営実態と課題	夕張市
川村ゼミⅡ	介護労働の実態について	札幌市
北倉ゼミⅠ・Ⅱ	長沼町グリーンツーリズム事業	長沼町
小田ゼミⅠ・Ⅱ	苫小牧東部工業開発計画と周辺地域開発の諸問題	苫小牧市・平取町
佐藤信ゼミⅠ	士別市のめん羊を活用した地域づくり	士別市
徐ゼミⅠ・Ⅱ	日中経済と地域振興	芦別市・千歳市
高原ゼミⅠ	訓子府町の農業・商業の問題点と今後の訓子府町について	訓子府町
高原ゼミⅡ	訓子府町商店・消費者の意識実態調査	訓子府町



発表者へ質問する参加学生



ゼミ名	テーマ	研修地
西村ゼミⅠ・Ⅱ	高齢者生活調査の結果と展望	夕張市
平野ゼミⅠ	フェアトレード～格差をなくす貿易	札幌市
平野ゼミⅡ	G8サミットの経済効果と地域社会への影響	札幌市・洞爺湖町・壮瞥町・豊浦町・留寿都村
古林ゼミⅠ	北海道の代表的な地場産業であるサケ漁業の生産・加工の実態と理解	標津町
古林ゼミⅡ	日高の競争馬生産	浦河町・様似町・新ひだか町
水野ゼミⅠ・Ⅱ	浅野炭鉱・昭和炭鉱の労働者の実態を学ぶ	沼田町
水野谷ゼミⅠ・Ⅱ	地方商店街の活性化～北海道訓子府町の事例調査～	訓子府町
山田ゼミⅠ	函館の地域メディアの現状を知る	函館市
山田ゼミⅡ	沖縄の地域メディアを実体験する	札幌市・沖縄県

沖縄県



本道酒造界のリーダーが大学時代に学んだ組織の動かし方

小林 米孝さん

こばやし よねたか



小林酒造の酒蔵（小林さんが撮影）

北海道を代表する日本酒「北の錦」で知られる小林酒造は明治11年に創業した、130年を越える歴史を持つ企業だ。老舗の4代目として小林酒造を中核とした小林グループを率いる小林米孝さんは、酒蔵の公開、高級酒への全面転換といった改革を成し遂げ、「北の錦」を現代の銘酒として蘇らせた。保守的な企業風土の抵抗を押しつける改革の原動力となったのは、大学時代のサークル経験だったと小林さんは言う。

北海道に人脈を広げるため

小林さんは昭和37年、小林酒造のある空知管内栗山町に生まれた。高校は北海高校に進み、北海学園大学を選んだのは、家業を継ぐことを前提に、北海道内の大学を卒業して人脈を道内に広げてもらいたいという両親の希望に添ったからだった。

「高校・大学を合わせると、豊平キャンパスには7年間通ったことになります。思えば、私の青春のすべては豊平キャンパスにあったんですね」という小林さん。北海高校で規則正しい寮生活をおくる中で、キャンパスを共にした北海学園大学の自由な学風を目にしていた小林さんは「大学に行ったらサークルに入って活動する。家と学校の往復だけの学生生活にはしたくない」と心に決める。

そして経済学部経営学科に入学すると、子供の頃から写真や映像に興味があったことから、映画研究会の門を叩いた。

「新歓コンパが強烈でした。当時の学生は競って酒を飲みましたから、新入生は徹底的に飲まされるんですよ。でも、私は酒屋の生まれでしたから酒には強く、コンパが終わってみれば潰れないで残っていたのは私だけだったんです」

人と組織を学ぶ

当時の映画研究会の活動は、毎月決められた映画を観て論評し合う月例会と、年2回の自主映画の制作が中心。小林さんは主にシナリオ制作を担当したが、

「映画に対して徹底的に議論を戦わせるんですよ。意識が低いとぐうの音も出ないほど論破されるんです。映研に入るまでは「映画は楽しければいい」と思っていたから、突き詰めて考えたことはなかった。それで1年



1985年卒業アルバムより映画研究会集合写真（前列左から2人目）

の頃は「考えが甘い」と先輩から徹底的に追求されました。討論が苦手な人にはつらい場所だったと思います」

負けず嫌いな小林さんは、論争から逃げることなく映画に対する理論を磨き、学年が進むに連れ下級生の議論をリードする立場になっていった。この時の経験は、経営理念を磨き、内外に伝えていく企業経営者としての資質をつくる土台になったと言う。さらに、映画研究会での活動と平行して関わった自治会での活動も今につながる財産になったと小林さんは言う。

「映研は自治会や文協、そして十月祭実行委員会に多くの人材を送り出していました。私も2年生の時に自治会の財務部長。3年生の時に書記長になり、十月祭の時には財務局長を仰せつかりました。

サークルとは違って、自治会や実行委員会では、いろんなところから来た者たちが同じ目標に向かって活動を共にします。高校と違って大学は、先生の指導のない学生の自主運営ですから、組織を動かす難しさと面白さの両方を学ぶことができました」

文化としての日本酒を広める

大学を卒業した小林さんは、東京の日本石油に勤めた後、平成元年、故郷の小林酒造に入社した。そしてすぐに取り組んだのが酒蔵の一般公開だった。

「日本酒の消費は1973年に頂点に達していましたが、日本酒を伸ばすためには、文化として広めていくしかないと思ったんです。と

ころが「神聖な酒蔵によそ者を入れるとは何事か」と強い反対にあいました。また「誰が見に来るのか」という声もありました。平行して大衆酒から高級酒への転換を進めましたが、ここでも「北海道で高い酒を造って誰が飲むのか」という反対にあったんです」

栗山町にある小林酒造の酒蔵は、今年年間10万人が訪れる観光名所となっている。また高級酒に転換した「北の錦」は、2004年全国新酒鑑評会で金賞を受賞した。

「酒造りも映画制作も、実はよく似ているんですね。映画作りにシナリオや絵コンテがあるように、酒造りにも「こんな酒を造りたい」という明確なイメージが必要です。これを酒造りに関わる職人や社員にきっちり伝えていく必要がある。映画監督が自分の思いを熱く説いてスタッフを動かしていくように、酒造りでもリーダーが熱く語らなければ人は動きません」

学生時代に取り組んだ映画とだぶらせて経営理念を熱く語る小林さんの瞳は、四半世紀前、まだ木造だった北海学園大学のサークル棟で、石炭ストーブを囲みながら熱く語りあった、あの時代から変わっていないのだろう。



- profile.....
- 1962年 栗山町生まれ
 - 1981年 北海高校卒
 - 1981年 本学経済学部経営学科入学
 - 1985年 本学卒
 - 1985年 日本石油入社
 - 1989年 小林本店、小林酒造入社
 - 2001年 小林本店、小林酒造社長就任

私の履歴書

神谷 順子 経済学部地域経済学科教授
[日本語教育学・異文化間教育学・教育心理学]
かみや よりこ



1967年「国際セミナー-自然科学と人文科学との対話」にて(前列中央トロン彫、中列左端 神谷先生、後列左端 高久俊一元教授、右端 大江敏美元教授 理系・文系北大教授)



経歴

1941年 札幌市に生まれる
1960年 藤女子高校卒
1964年 上智大学文学部卒
1964年 私立大和学園高校社会科教師
1965年 北海道大学センター副主事
1987年 北海道大学言語文化部及び留学生センター非常勤講師
1993年 北海学園大学留学生日本語教育非常勤講師
2000年 北海道大学大学院教育学研究科博士課程単位取得退学
2003年 北海学園大学経済学部教授 現在にいたる

主な研究業績・著物

「北海道在住外国人へ野日本語支援活動に見る地域ネットワークとメディアエターの役割」北見・佐呂間地域の事例から」
「多文化理解・共生をめざす日本語教育の可能性」地域経済のグローバル化と大学教育の再編 2005年 共同文化社
北海学園論集から「日本人大学生の異文化接触に関する研究」2002年
「異文化接触による相互の意識変容に関する研究」2007年
「総合的学習を採り入れた学部留学生の日本語教育」2008年 北海学園大学日本語日本語学会誌
「留学生が創る地域国際交流の可能性」2007年「留学交流」ぎょうせい



神谷先生宅で留学生交流パーティー

私の大学時代

1960年、所謂'60年安保のときに、私は東京で大学生活を始めました。デモ、学生集会が都内のいたるところで開かれており、入学早々、学生運動の渦のなかに身を置くことになったのです。大学では西洋史を専攻しましたが、その時出会った欧米の教授たちの格調高い講義は今でも忘れられません。外国人との接触もあまりない時代、欧米の合理的な考え方に直接触れたことが何よりも新鮮で興味深いものでした。

大学2年のとき、仲間と一緒に始めたセツルメント活動も後の生き方に大きな影響を与えました。東京都江東区にある父子寮の子供たちと関わることになりました。当時、高度成長期の日本で、そこからはじき出された子供たちとの関わりは、自己実現に悩んでいた私にとっても希望が与えられた活動でした。

高校教師を経て「北大センター」での仕事

大学卒業後、高校の社会科教師となりましたが、体調を崩し、札幌に戻ってきました。札幌では「日本聖公会北海道大学センター」というところで働きました。当時の北大文学部長の中川秀恭教授とウィリアム・エディ氏(米国聖公会宣教師であり北大講師)が中心に始めたもので、幅広い分野の研究会が開かれ、大学関係者や外国人などが共に学ぶ知的交流の場でもありました。私は同僚のアメリカ人青年と協働で企画運営を担当し、鋭い日本批判を受けながらも斬新なアイデアに学ぶことが多く、最初の異文化接触経験となりました。

タイとグアテマラでの異文化体験

結婚と同時に、夫がコロンボ計画でタイのマ

ヒドン大学に派遣され、1968年から3年間、バンコクに滞在しました。私は仕事から離れ、子育てに専念していました。

当時のバンコクは東南アジアの中心地として多くの国際機関があり、世界からの要人が往来する地でした。街の中心にはアジア進出を図る日本企業の支店や日系会社が軒を連ねており、日本人とみると「味の素、トヨタ」と声をかけられた時代でした。一方、当時のタイはベトナム戦争帰りのアメリカ兵の中継地点でもあり、戦争の一面を見せる異様な光景が街のあちこちにみられました。

その10年後、今度は夫の仕事で中米グアテマラに1年間滞在することになり、私はスペイン語学校でひたすら語学の勉強をしていました。中米では貧困層によるゲリラ活動が日常におこり、爆発、誘拐、暗殺など全く想像もつかないことが身近に起るという経験をしました。一方で、マヤ文明の美しさはいまでも脳裏に焼きついています。

これらの異文化との出会いは、私が日本語教師の道を歩み、また、大学院での異文化接触に関する研究に取り組むきっかけとなりました。

高校教師から日本語教師へ

グアテマラから帰国後、高校の非常勤講師となり地理を教えました。この授業を助けてくれたのが、世界各国からの留学生でした。当時の北海道大学にはすでに4百人近くの留学生がおり、彼らは自国の文化を語ることを誇りとしていました。この留学生との出会いが日本語教育の仕事に入るきっかけとなりました。北大の国費留学生への日本語教育が仕事の始まりで、世界各国からの留学生と関わり、現在までに約88カ国の人たちに教えてきました。私が「異文化適応」を研究テーマに大学院入学を決意したのもこれらの経験からでした。

大学院時代

異文化適応研究から在住外国人研究へ

1995年、北海道大学教育学研究科の大学院に入り、発達心理学研究室でこの問題と取り組み始めました。修士課程・博士課程では、留学生・外国人を対象に異文化適応に関わる要

因について調査研究を行ってきました。現在、北海道にも外国人増加に伴い、多文化共生という視点が求められてきています。在住外国人がどのように地域に参入し、生活者となるのか、特にオホーツク地域を中心に酪農花嫁、研修生の問題などを中心に聞き取り調査を行っています。

北海学園大学での留学生日本語教育

平成5年、北海学園大学に日本語教育が開講され、非常勤講師として学部留学生への日本語教育を担当したのが始まりで、今日まで学園の留学生教育を担当しています。現在は、「異文化間教育学」と「日本語教授法」の講義も担当しています。本学の留学生は様々な活動を通して大学と地域社会を結ぶ役割を担ってくれています。留学生の持つ文化的リソースは日本社会を豊かにしてくれるものと考え、日本人との協働的活動が活発になされることを期待し、応援しています。



基礎ゼミで

学生諸君へ一言

若いうちにできるだけ異文化に接する機会を持つことをお勧めします。留学もその一つですが、日本にいる留学生との交流を通して多様な価値観に出会うことができます。大学では日本人学生と留学生が協働で活動することを推進しています。その過程では、文化的差異や葛藤などを経験するでしょう。しかし、それらの経験が自己の成長につながるのです。現在は、多くの文化圏の人たちとの接触交流が当たり前になってきています。この時代を生き抜くためにも、国際社会で活躍するためにも、若いうちに積極的に異文化接触の機会をもってほしいと思います。



は楽しい!

1. インゼミへGO!

みなさんは、インターゼミナル大会(以下、インゼミ)というものを知っていますか。ひらたくいえば、全国の大学から集まった学生たちで分科会を結成し、自分たちがふだんゼミで研究しているテーマについて、論じあうというものです。ゼミ単位で参加するもので、ここ数年では、水野谷・越後・川村ゼミが毎年参加しています。開催時期は、毎年12月ですが、開催地はいろいろで、今年は、九州の福岡大学で開催されました。

2. 今年のテーマは社会保障の現状と課題

私たち川村ゼミの今年の研究テーマは、社会保障制度の現状と課題について、でした。みなさんご承知のとおり、医療・介護・年金など私たちの暮らしや命を守る社会保障制度はいま危機に瀕しています。その現状と、どうすれば改善できるのか、私たちは1年間学び続けてきました。



そして、インゼミ当日には、私たちと分科会を結成した、大分大学、九州産業大学の計3大学のゼミでこのテーマで議論をしました。

3. 勉強の積み重ね、調査活動、論文の作成、熱い議論

ちなみに、インゼミは、参加当日の議論それ自体もちろん大事ですが、当日までにどれだけの勉強を積み上げることができるかが決定的に重要です。私たちのゼミでも、4月から社会保障関連の本を読みあさり、また、自分たちで介護・介護労働に関する実態調査も行い、そしてその成果を論文にまとめあげ、インゼミにのぞみました。詳細は省きますが、当日の分科会で議論になったのは、社会保障のサイズをどうするのか、その財源・調達方法はどうするのか、という二点でした。とりわけ後者については、社会保険方式を採用するのか、税方式を採用するのか、あるいは、税方式を採用する場合でも、どういう税の種類や課税方法を採用するのか、等々の熱い議論が闘われました。こうした作業を通じて、自分たちの考えが鍛えられることになります。

4. インゼミは楽しい!

インゼミは、1年間かけてみっちり勉強しその成果を発表する場であり、毎年、インゼミが終わると充実感・達成感そして解放感をひひしと感じます。そんなこともあって、開催地での打ち上げは大いに盛り上がり、また、あいた時間

をつかって開催地で物見遊山するなどゼミ旅行の側面もあり、とても楽しい機会です。充実したキャンパスライフを送りたいと考えているみなさんは、ぜひ、インゼミに参加してみたいはかがでしようか。



インゼミに参加した川村ゼミ生

インゼミとは、日本学生経済ゼミナルが開催する「インターゼミナル大会」の略称で、経済学・経営学・商学を学ぶ学生による、全国最大規模の学術論文大会である。



廣崎吉晋君

この大会の運営に、北海道で唯一の加盟校として携わった本学経済学部ゼミナル協議会の廣崎吉晋君(経済学科2年)は、インゼミなどに関わった経験からも、ゼミナル活動そのものの活性化を図りたいと、恒例のソフトボール大会の運営だけではなく、1年生を対象にした「ゼミプレゼン大会」を企画中だ。

JICAインターンシップへの参加

JICA(国際協力機構)札幌の大学連携プログラムによる2008年度のインターン受け入れが行われ、7月30日から約2週間、本学経済学部地域経済学科3年生の久慈綾子さんが、早稲田大・北大などの他大学生と共に参加した。研修の最後には、様々な国の研修生のサポートや、その中で得た交流を「企業の社会貢献」というレポートにまとめるなど充実したインターンシップを経験し

た。高校時の海外修学旅行で訪れたタイの子供たちとの交流から、国際交流・国際支援ということの大切さを感じ取ったという久慈さんは、ゼミ活動の経験なども含め、国際協力という視点を重要と考えている。将来的には、技術を習得して、青年海外協力隊にも参加したいとのこと。社会人としても、その活動の場を広げていきたいという。久慈さんの今後の活動に期待したい。



研修生からの贈物と久慈綾子さん 久慈さん(前列右から2人目)とJICA研修生のみなさん

就職情報

公務員・教員登録状況

[平成20年度～平成17年度卒業生・全学部]
平成21年1月14日現在

名称	人数				
	20年度	19年度	18年度	17年度	
国家公務員Ⅰ種	0	4	0	0	
国家公務員Ⅱ種	37	33	25	42	
国税専門官	28	16	24	14	
法務教官 A・B	0	1	0	0	
裁判所事務官Ⅱ種	12	10	4	4	
国会議員政策担当秘書	1	0	0	0	
防衛庁Ⅱ種	0	2	0	0	
自衛隊幹部候補生	4	7	4	9	
自衛隊一般曹候補生	13	4	4	6	
自衛隊曹候補士	-	-	20	13	
北海道職員	上級(一般行政)	1	2	0	3
	中級(教育・警察行政)	9	16	17	10
	中級(学校事務)	2	3	0	0
その他都府県	上級	4	5	0	1

※1) 本人申告分。受験資格が高卒以上になっているものは大学別合格者数が開示されておらず、申告ベースによる値。入国警備官・刑務官など。

名称	人数				
	20年度	19年度	18年度	17年度	
北海道	警察官	73	89	84	60
	女性警察官	7	2	2	7
警視庁警察官・女性警察官	3	12	14	7	
その他警察官	6	8	14	13	
札幌市	行政	20	14	10	5
	技術系	1	1	1	1
	学校事務	6	1	2	1
	障害者	0	0	0	1
	消防	11	10	7	8
その他市町村	55	47	23	27	
その他公務員(上記分類以外)	12	3	17	9	
大学別合格者の公表のない試験※1	1	3	4	9	
公立学校教員	26	33	23	19	
独立行政法人等※2	76	67	33	40	
総計	408	393	332	309	

※2) 国立大学等独立行政法人・郵政公社等。

国家公務員Ⅱ種合格者数 大学別順位(行政職のみ)

20年度(19年度)	大学名	人数(19年度)
1 (1)	早稲田大学	185 (187)
2 (2)	中央大学	141 (161)
3 (3)	明治大学	138 (147)
4 (5)	金沢大学	122 (118)
5 (6)	立命館大学	121 (115)
...
15 (13)	北海道大学	63 (66)
...
34 (58)	首都大学東京	38 (18)
35 (35)	北海学園大学	36 (32)
35 (53)	琉球大学	36 (20)
...
60 (53)	小樽商科大学	18 (20)
...